

オープン
カレッジ

詰め込み教育と呼ばれた時代から、1992年ごろを転機に小・中・高校などの学校へ2002年に学校完全週5日制が導入された。学校では、「ゆとり教育」の教育課程が実施された。学校の中では、調べる学習が盛んになり総合的な学習の時間が小・中・高校の授業として始まった。そのため、学校での学習時間が少なくなったことが見直され、ゆとり教育から11年に「脱ゆとり教育」へと転じ、学校外の学習時間も大幅に伸び15年には1日

学校図書館の今日的役割

間がゆとり教育の時代から教育課程に位置づけられ続いている。

総合的な学習の時間で、情報収集の学習活動で集めた情報を整理したり、分析したりして思考する活動となっていく。情報をまとめ、思考として表現し新たな課題を自覚することが大切である。そのなかで具体的に伝える方法を身に付け、伝える内容を十分に蓄積していくことになる。

学校内では、こうした活動の場として学校図書館が大切な役割を担っている。学校図書館に関して肝要なことは、「資料」「施設・設備」「人」の三つの構成要素である。これらは学校図書館の利用との間に深い

なってくる。

そうしたことから学校図書館運営の中心を担う司書教諭の役割が脚光を浴びている。司書教諭の養成講習を全国で実施し、人の配置が進められてきた。現在の知識基盤社会は、情報や知識が重要になった社会であり、司書教諭には情報やメディアの専門家としての役割への期待が増してきている。

また、学校図書館事務職員としての学校司書が、館内閲覧、館外貸出、資料の利用案内などの職務を担当する。両者の協働関係の下に、教育委員会、学校管理者、図書の係教諭、学級担任、教科担任、図書館主任、図書館ボランティアなどが関係して図書館の業務が行われている。

学校図書館には、読書活動の拠点としての読書センタ―機能、児童・生徒に指導的に関わり学習を支援する学習センタ―機能、児童・生徒・教員の情報ニーズに対応する情報センタ―機能が期待されている。

今日の学校図書館は、学び方を学ぶ学習・情報センタ―として、学習という営みで必要な情報を検索・加工する力を育ませ、学びと情報の橋渡しができるようにしなくてはならない。学校図書館司書教諭と学校司書を中核とした、従来からの書籍に加え多様な情報・メディアを活用する学び方の指導が重要となっている。

情報と学びの

橋渡しに期待

当たり95分へと増えた。しかし、学校内での学習については、基本的に調べる学習を行う総合的な学習の時



名古屋文理大学
短期大学部教授

栗原 寿男

くりはら としお 学校経営、
教育方法・技術。同志社大学商学部卒(経営学)、マサチューセッツ大学アーモスト校米国社会研修了。1947年生まれ。